日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇二三年（令和五年）十二月二〇日
第二號（通巻第四四號）

八大山人「安晩帖」冬瓜鼠図（泉屋博古館蔵）

目録

巻頭言
二　第75回大会を終えて　大木　康
四　「書庫」と「文庫」のこと　荒木龍太郎
六　国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎—近代東洋學の射程」報告　玄　幸子
八　イェンチン研究所滞在記　酒井　規史
一〇　二〇二三年度日本中国学会賞について
一一　各種委員会報告
大会委員会／将来計画特別委員会／出版委員会／研究推進・国際交流委員会
一三　二〇二三年度　会員動向／新入会員一覧
一五　日本中国学会二〇二二年度（令和四年度）収支決算書
一六　日本中国学会二〇二三年度（令和五年度）予算書
一七　事務局からのお知らせ／「国内学会消息」についてのお知らせ
一九　「会員論著目録（二〇二三年）」作成への協力のお願い
二〇　「日本中國學會報」論文執筆要領

編集◉京都大学文学研究科　宇佐美文理
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
メールアドレス：gakkaidayorikyoto@gmail.com
発行◉日本中國學會
〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25　斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

第75回大会を終えて

理事長
大木　康

日本中国学会第75回大会は、10月７、８の両日、大阪大学豊中キャンパスにおいて開催されました。二日目の午後雨が降りはじめたものの、それまでは好天に恵まれ、緑あふれるキャンパスに400名もの参加を得、盛況のうちに幕を閉じることができました。開催校代表浅見洋二先生をはじめ、大阪大学のみなさまに、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

今大会では、二つの書評シンポジウムに加え、54件の研究発表が行われました（哲学・思想及び歴史15件、文学25件、日本漢学14件）。久方ぶりに懇親会も開催され、170名を超える参加者があり、会場も超満員の盛況でした。

研究発表といい、懇親会といい、コロナ禍の数年をはさんで、多くの会員のみなさまが、いかに対面での開催を望んでおられたかがひしひしと感じられました。個別の研究発表についても、やはり対面での議論で、微妙なニュアンスが伝わりやすかったのか、いずれの会場でも活発な討論が行われており、ようやくコロナ前の旧に復したとの実感がありました。来年以降も順調に大会が開催でき、ますますレベルの高い発表が行われてゆくことを期待したいと思います。

コロナ前には大会前日、金曜日の午後に理事会、評議員会を開催しておりました。コロナの間は、大会の前にオンラインによってこれらの会議を済ませておりましたが、今年はこちらも旧に復し、二つの会議を対面で開催いたしました。その場で議論し決定いたしましたことから、重要ないくつかを紹介させていただくことにいたします。

（一）大会の開催方法について

ここ数年、大会の後に、将来計画特別委員会の担当により、大会アンケートを実施してまいりました。この間の大会アンケートの結果を見ておりますと、ハイブリッドによる開催を望む声が多く寄せられておりました。会場に行ける方は、会場で対面による参加が可能であり、会場に行けない方は、たとえ遠く海外からでも参加が可能であるハイブリッド開催は、たしかに理想的な方法にはちがいありません。しかしながら、ハイブリッド開催のためには、会場とオンライン、両様の準備をする必要があり、開催校に多大の負担がかかることになります。理事会といたしましては、大会の開催方法については、開催校のご意向を尊重する、ということを確認いたしました。なおも、全会場をリアルタイムで結ぶ完全なハイブリッド開催は、技術的（また経済的）に容易ではないかもしれませんが、部分的なオンライン配信などは、比較的容易に実現可能かもしれず、学会としても、将来にわたって、よりよい大会の開催方法を模索してまいりたいと考えております。

（二）日本中国学会賞の選考について

日本中国学会賞は、これまで哲学・思想部門、文学・語学部門から受賞候補者を選定することとしておりました。しかしながら、論文投稿の時点で、これら二つの部門に、日本漢学、そして歴史の部門が加わっています。こうした現状を承け、次回の選考からは「全投稿論文のうちから、原則二件を選ぶ」ことといたしました。これからは表彰にあたって、「受賞者　受賞論文　〇〇部門」

といった表現に変更いたします。選考にあたっては、部門に偏りがおこらないよう配慮することはいうまでもありません。日本中国学会では、学会賞の授与を重要な活動の一つと位置づけております。多くのすぐれた論文が投稿されることを期待したいと思います。

（三）「学界展望」中国語訳の公開について

『日本中國學會報』掲載の「学界展望」（第70集以降）の中国語訳が、中国社会科学院文学研究所の『古代文学前沿与評論』誌に掲載されています。中国語訳にあたっては、出版委員会で時間をかけて訳稿のチェックなども行っています。せっかくの「学界展望」中国語訳を本会のホームページ上でも公開し、お読みいただけるようにいたします。

（四）大会における書評シンポジウムについて

研究推進・国際交流委員会の企画として2022年の大会ではじまりました書評シンポジウムは、毎回多くの参加者を得、昨年度の大会アンケートでもたいへん好評でした。今後も大会委員会、大会開催校などとも協力しながら、書評シンポジウムを継続して行ってゆくことを確認いたしました。

（五）大会アンケートについて

今回の大会につきましても、大会アンケートを実施することといたしました。すでに開始しておりますので、ふるってご回答くださいますようお願いいたします。大会のほか、日本中国学会の運営全般についてもご意見をおうかがいしております。貴重なご意見をお寄せいただければ幸いです。

（六）会員論著目録について

将来計画特別委員会において2022年の会員論著目録（試行版）を作成し、ホームページ上で公開しております。全体で300件を超える著書論文が登録されており、通覧いたしますと、このような本、論文があったのかということに気づかされ、たいへん参考になります。2023年の論著についても、試行的作成を継続する予定です。目録は、登録件数が増えれば増えるほど利用価値が高まってまいります。会員論著目録への掲載は、いわば会員の権利ですので、ぜひともご登録のほどをお願い申し上げます。

（七）選挙の電子投票一本化について

来年は評議員の改選年にあたり、選挙が行われます。前回の選挙において、はじめて電子投票を行い、投票率が以前と比べ格段に向上いたしました。来年の選挙におきましても、電子投票による投票を行いたいと思います。前回は過渡期ということもあり、紙の投票用紙での投票も可能という道を準備し、手間をかけて被選挙者名簿などを作成しておりました。しかしながら、実際には、紙での投票を希望された会員の方は一人もおられませんでした。こうした状況を踏まえ、次回からは評議員等の選挙にあたって、電子投票に一本化することに決しました。電子投票にあたっては、メールアドレスを登録していただくことが必須となります。メールをお使いにならない方もおられるかもしれませんが、選挙用のメールがお手元に届きさえすれば投票は可能ですので、おことわりいただいた上で、ご家族、友人のメールアドレスをご登録いただいても差し支えありません。この機会に、メールアドレスの登録を改めてお願い申し上げます。

（八）各種委員会の見直しについて

本会の活動をさらに活発にするためにはどうしたらよいか、将来計画特別委員会に検討していただいた答申では、今後の会の活動にあたって、デジタル化の推進はさけられないとのことから、デジタル化に特化した委員会の設立が提案されました。それを承けて、各種委員会見直しの作業部会を立ち上げ、検討を進めております（座長は吾妻重二副理事長）。検討の結果は、来年の評議員会、総会でご提案させていただきたいと考えています。

現在本会では、ホームページによる広報活動を強化しています。本会よりのお知らせのほか、各種研究会案内、公募情報なども掲載しておりますので、本会ホームページをご覧いただければ幸いです。

来年の10月12、13日、また二松学舎大学でお目にかかれますことを楽しみにしております。

「書庫」と「文庫」のこと

荒木龍太郎

今日、リモートによる研究会、講義、またPDF漢籍アーカイブ、電子テキストなど、研究・教育環境の変化の速さには驚くばかりである。40数年前、国立公文書館、尊経閣文庫で漢籍を閲覧し、必要箇所の写真撮影を依頼していたことを思い出す。

昭和48年（1972）、九州大学２年後期に専門の「中国哲学史」に進んだ。研究室の向かい側、廊下を挟んで中国文学、東洋史学と合同の「書庫」があった。初冬のある日、ふと書庫に入り、見上げると紺色の帙が目に入った。梯子を上って書架から取り出し、研究室で小鉤を外し帙を開いた。それは明の嘉靖37年刊本の『歐陽南野先生文集』だった。上質の紙。数丁めくってみたが歯が立たなかった。

大学収蔵の印には「昭和５年８月25日」とあった。研究室初代教授の楠本正継博士（1896～1963）が「哲学及び支那哲学史研究」のため独・英・中へ留学し、昭和５年４月に帰国してまもなくの日付である。昭和15年入学の荒木見悟先生（1917～2017）、また諸先生・先輩方も読まれてきたのだと想いを馳せた。

演習の準備で書庫と研究室を幾度も往復した。時折、書庫で荒木先生をお見かけすることがあった。張り詰めた空気が漂っていた。「研究室―廊下―書庫」、この空間は教官と学生が行き交い一体感を醸成する場であったと思っている。

文学部所属の「書庫」の漢籍類は大学の移転に伴い中央図書館に一括して保管され、リファレンスも充実しその恩恵を受けている。

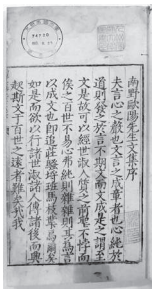
漢籍類には宋明思想関係の「文庫」があり、日本儒学関係資料も多数含まれる。ただ無名の著述、未刊文書、様々な写本も多く整理に時間を要している。

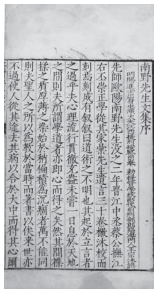
特色は山崎闇斎学派の三宅尚齋の学統を継承する楠本端山・碩水に関わる「文庫」が多いことである。楠本博士の祖父が端山（18281～1883）、その弟が碩水（1832～1916）ということが関係している。「文庫」は以下のものがある。

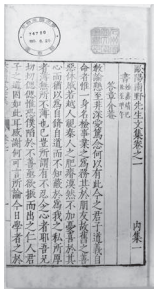
（1）朱子学・崎門関係

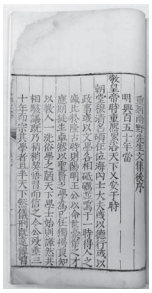
・「碩水文庫」＝幕末平戸藩儒楠本碩水の旧蔵書で宋明思想、山崎闇斎学派諸儒の著述類。・「坐春風文庫」＝楠本

『歐陽南野先生文集』


梁汝魁序


王宗沐序




馮惟訥後序

（近年刊行された陽明後学文献叢書の『歐陽德集』では、存目叢書本と同様、梁汝魁の序、馮惟訥の後序は載せていないが、九大本はそれを備えている。この二序は尊経閣本にもない。序文、後序については宇佐美文理氏、三浦秀一氏のご教示を賜った。）

博士がロックフェラー財団の援助資金により収集した宋明思想文献類。・「崎門文庫」＝生田正庵（1870～1936）の宋明思想関連の蔵書。正庵は陽明学者吉村秋陽（1797～1866）の弟子の東沢瀉（1832～1891）に入門した明治から昭和期の陽明学者で楠本碩水にも従学。・「益田文庫」＝碩水門下の益田古峰（名は祐之・旧制修猷館中学教師・1867～1944）の宋明思想・山崎闇斎学派諸儒関連の旧蔵書。・「近藤文庫」＝楠本碩水の親友の近藤畏斎（名は久敬）の宋儒・闇斎学派諸儒の著述。・「武内文庫」＝楠本碩水門下の武内謙介の宋明諸儒・闇斎学派諸儒の著述。

関連して「楠本家旧蔵書簡集」〔楠本家旧蔵の碩水宛を中心とする書簡類。（整理中）〕、「楠本家資料」〔楠本博士旧蔵の儒学関係の和漢書・書画・書簡類を中心とする資料。（整理中）〕がある。

（2）陽明学關係

・「吉村家文庫」＝広島三原藩の陽明学者吉村秋陽（名は晋）、斐山（名は駿・1822～1882）、白斎（名は彰・1853～1908）の三代にわたる吉村家旧蔵の宋明思想関係資料。日記、草稿、書簡類などの未刊文書類が大部分を占める。秋陽は、佐藤一斎に従学し、他人には見せなかった「大学古本旁釋」や「大学摘説」の稿本を示され、以後も昌平黌運営で協力を求められるなど、深く信頼されていた。『王学提綱』を著している。・「高瀬文庫」＝明治～昭和期の陽明学者高瀬武次郎（1869-1950）の儒学關係を中心とする旧蔵書。

また儒学関連では「竹田文庫」（福岡藩校修猷館の藩儒竹田家の旧蔵文書。貝原益軒の大量の書簡を含む。）がある。

以上、九大の宋明思想関係の「文庫」は、幕末維新期から昭和期にかけての朱子学者・陽明学者の未刊資料も多く含まれており、その間の朱子学・陽明学の実態、宋明思想研究の推移を考察する上で貴重と思われる。

筆者は「吉村家文庫」の九大への移管に関わった。その経緯を述べ「文庫」の理解を深める一助としたい。昭和54年（1979）頃、岡田武彦先生（1908～2004）から吉村秋陽の研究を勧められ、東京都世田谷区の御子孫のお宅へ伺い、保管してこられた刊本・文書・軸類を拝見し、調査をさせていただいた。それから数カ年にわたり文書・草稿類を写真撮影、複写し、目録を作成した。その後（1985年）、荒木先生と共に移管の手続き、作業を進めた。

その過程で、御当主から保管してこられた話を伺った。代々「常に手元に置く」ことになっていたので全国各地に転勤の時にも行李に詰めて赴任されたとのことである。奥様はその時の様子を笑いながらお話になっていたが、一方ならぬご苦労があったことと推察された。なお蔵書の一部が白斎（彰）の時に広島県師範学校（現広島大学）に寄贈され「東雲文庫」と名付けられたとのことであった。おそらく刊本の漢籍類であったと思われる。

「文庫」は、個人の蔵書、文書が子孫の方々の深い思いと並々ならぬ尽力により保管され、各研究機関・図書館に移管されている。その恩恵を受けるものとして敬意と謝意を表したいと思う。

なお、現在「九州近世儒学思想研究会」に於いて「吉村家文庫」（九州大学中央図書館所蔵）のうち、「読我書楼長暦」（秋陽の日記）の翻刻と注釈を行い順次活字化している。また「読我書楼文草」の翻刻と注釈は近日中に完成の予定である。（JSPS 科学研究費基盤研究（C）20K00066の助成による。）「文草」は明治15年刊行の『読我書楼遺稿』の巻一～三にあたる。「文草」から陽明学者池田草庵（1813～1878）の意見を参考にして斐山が３分の１に選定したものである。「詩稿」（『遺稿』巻四・詩）は後日に行うことにしている。翻刻作業には、「AI 手書きくずし字検索」、「AI くずし字認識アプリみを（miwo）」、「くずし字データベース検索」も使用している。これにより作業時間は大幅に短縮されている。

今後、研究環境は電子媒体、AI 活用が前提となるであろう。しかし自由に出入りし、漢籍に直に触れ、胸躍らせた「書庫」への「扉」は常に開いておきたいものである。

なお九大の漢籍類については、『日本九州大学文学部書庫漢籍目録』（周彦文：文史哲出版：1995）、『日本九州大学文学部書庫明版図録』（周彦文：文史哲出版：1996）がある。後者の多数の図版は有益であろう。

国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎—近代東洋学の射程」報告

関西大学
玄　幸子

少し時間が経ってしまった感はあるが、報告の価値ありとのご推薦を受けて、国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎—近代東洋学の射程」（2021年11月６，７日　於関西大学以文館）について詳細を述べたい。

まず、11月６日（土）の基調講演は銭婉約氏（北京語言大学教授）に「内藤湖南与民国書業界的交往」と題してお話しいただいた。内藤文庫に所蔵される商務印書館、来薫閣書店、泉寿東文書蔵などの内藤湖南宛の書状を整理分析することで内藤湖南と中国書籍業界間の交流状況が明らかになった。内藤湖南の豊富な蔵書蒐集過程を通して詳細な情報を得たばかりでなく、当時の日中間の出版・図書売買の方式などが示された。次に羅琨氏（中国社会科学院）の特別講演「从罗王书信看“罗王之学”之甲骨学的形成」は、羅振玉・王国維の往復書簡の中から特に甲骨文に関する議論が集中した時期を取り上げ「甲骨学」に焦点を当てて羅振玉・王国維の学問の形成に考察を加えたものであった。何れのご講演も新たな視点で知られざる逸話などを交えての内容で大変興味深いものであった。午後からの研究発表では、陶徳民氏（当時関西大学教授）が「内藤湖南の還暦・葬儀関連行事から見るその社会的影響」、高田時雄氏（京都大学名誉教授）により「日本敦煌學の創始と田中慶太郎—明治四十二年の内藤湖南宛書簡三通」、長谷部剛氏（関西大学教授）は「羅振玉『敦煌零拾』所載『雲謡集』について」と題して主に内藤湖南および敦煌文献に関する発表が行われた。その後は、堤一昭氏（大阪大学人文学研究科教授）「石濱文庫所蔵石濱純太郎の講義・講演ノート」、玄幸子「書簡から見る石濱純太郎と東洋言語学者たち」、長田俊樹氏（総合地球環境学研究所）「石濱シューレに集った言語学者たち—父長田夏樹の遺品から」という具合に石濱純太郎を中心に取り上げて論じた。

翌11月７日（日）は吾妻重二教授（関西大学東西学術研究所所長）の「石濱純太郎と内藤湖南」と題する基調講演から幕を開けた。近代東洋学のパイオニアの一人である石濱純太郎の関西大学との縁を紹介し、伝統漢学から近代東洋学へ移行するのに関連して泊園文庫蔵の資料に言及、更に湖南との交流をお話しいただいた。その後は陶徳民教授のコーディネートにより、林少陽（香港城市大学）、呉偉明（香港中文大学）両教授を含む研究者総勢14名（村田雄二郎同志社大学教授、黄東蘭愛知県立大学教授、銭鴎同志社大学教授、山田智静岡大学教授、朱琳東北大学准教授、石暁軍姫路獨協大学教授、小嶋茂稔東京学芸大学教授、石永峰関西大学東西学術研究所非常勤研究員、高木智見山口大学教授、劉岳兵南開大学教授、二ノ宮聡北陸大学講師）による研究発表および討論が続いた。すべてを紹介する紙面の余裕がないため詳細は関西大学東西学術研究所々報の第97号（https://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/publication/asset/report/report_97.pdf）を参照されたい。

湖南晩年の居所であった恭仁山荘とともに昭和59年（1984）に旧蔵書を譲り受け関西大学に内藤文庫が設置されて以来、内藤湖南及び内藤文庫に関連する各種の学会・シンポジウム、また資料の整理と公開がなされてきた。湖南関連は出版物も含めかなり多くなるので紙面の都合上ここでは詳細は割愛させていただく。

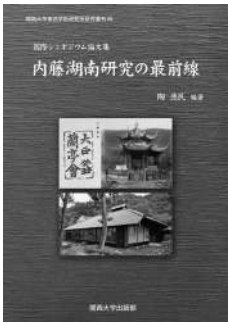
それと並行して、東西学術研究所の創立に大きく寄与され、また泊園記念会の創設者にして初代会長である石濱純太郎博士をテーマとしたシンポジウム、学会なども多くは泊園と関連付けて開催されてきている。この中で特記すべきは2018年10月26，27日の両日に開催された「東西学術研究と文化交渉―石濱純太郎没後五十年記念国際シンポジウム」（於関西大学以文館）であり、吾妻重二編著同題名論文集も2019年11月に出版されている。このシンポジウムは今回の国際シンポジウム開催の契機になったともいえる重要な意味を持つ。開催当時は関西大学図書館で「石濱純太郎の学問と人脈」展も開かれ石濱純太郎の卒業論文「欧陽脩攻究」や日記も初公開され大きな話題を呼んだ。

ところで内藤湖南と石濱純太郎の交流は共に欧州調査旅行に赴いたことも良く知られ、深いつながりがあったのであるが、不思議なことに二泰斗を同時にテーマに取り上げて開催されたシンポジウムや学会は皆無であった。今回のシンポジウムの特徴と意味を述べるならば、まずこの点が挙げられよう。つまり内藤湖南と石濱純太郎を並べてテーマに掲げた点において従来になかった特異性を認めうる。また、藏書家としての湖南、石濱に焦点を当てるのであれば、関西大学図書館「内藤文庫」と大阪大学図書館「石濱文庫」という２大文庫資料を利用した研究の可能性が無限大の広がりを見せることは言うまでもなかろう。今後の研究の方向性を示唆する上でも非常に大きな意味を持つと考える。さらに付け加えるならば、懐徳堂文庫と泊園書院の資料の存在を忘れてはならない。大阪発信の漢学・東洋学が今後世界へ向けて大きく広がるきっかけになればと大きな期待がわいてくる。

簡単な紹介に止まらざるを得ないが2023年３月にこのシンポジウムの論文集が２分冊で出版されている。ご参照いただければ幸いである。下記に関西大学出版課の紹介文を中心に紹介しておく。URL は関西大学出版課の当該図書の紹介頁である。

玄幸子編著『国際シンポジウム論文集　内藤湖南と石濱純太郎　近代東洋学の射程―内藤・石濱両文庫収蔵資料を中心に』（関西大学東西学術研究所研究叢刊65　2023年３月）内藤文庫（関西大学図書館）・石濱文庫（大阪大学図書館）に収蔵される資料から内藤湖南・石濱純太郎を中心に据えて日本近代東洋学の歩みを見るというテーマでまとめられた。内容は内藤湖南論・石濱純太郎論ばかりでなく敦煌学・言語学・文献学・文学・研究史など多方面におよぶ。巻表紙には通常入室できない内藤文庫および石濱文庫の書庫内の写真を使わせていただいている。

（https://www.kansai-u.ac.jp/Syppan/2023/03/860996e4b97462c87e02b0af57d1b1b93cc940a5.html）



陶徳民編著『国際シンポジウム論文集　内藤湖南研究の最前線』（関西大学東西学術研究所研究叢刊66　2023年３月）シンポジウムの内容の一部を「内藤湖南における学問と政治」、「内藤湖南の学術・芸術とその周辺」と「内藤湖南の儒教思想と仏教観・神道観」をめぐる論考14編にまとめて収録している。

（https://www.kansai-u.ac.jp/Syppan/2023/03/f1c8421091b18f17e5431cba645222aa4833f601.html）

イェンチン研究所滞在記

慶應義塾大学
酒井　規史

筆者は2022年８月末より2023年３月末まで、ハーバード大学イェンチン研究所で在外研究を行う機会に恵まれた。本稿はその滞在記である。

実は、今回の在外研究について何か書いてほしいという執筆依頼を受けた際に少々悩んだ。というのも、最近はアメリカに研究に行くことも珍しいことではないからである。しかし、この『学会便り』のバックナンバーを確認してみたところ、在外研究（もしくは留学）をテーマにしたエッセーは数編しかなかった。そこで、最新の事情を紹介するのと、記録も兼ねて滞在記を書くのも悪くないと思いなおした次第である。

中国学に携わる研究者ならば、イェンチン研究所（以下、HYI と略称する）の名は聞いたことがあろう。北米のみならず、世界でも最大規模のアジア研究の拠点である。実業家であったチャールズ・M・ホールの遺産をもとに1928年に設立され、90年以上の歴史を持っている。ハーバード大学と強い提携関係を持っているが、財政的には独立しているのが特色である。後述する訪問学者に対する手厚いサポートはその潤沢な資金によるものである。（注）

今回、筆者は HYI の訪問学者プログラム（Visiting Scholar Program、以下 VSP）に応募して、幸運にも参加することができた。大学院時代、筆者の指導教授である小林正美先生（早稲田大学名誉教授）が VSP に参加した経験をしばしばお話しして下さり、現地での充実した研究生活についてうかがううちに、自分もいつの日か HYI で訪問研究をしたいと思うようになっていった。今回、二十年来の念願がかなったわけである。

この VSP は HYI の中心的な活動のひとつであり、毎年、アジア各地から二十数名の研究者に奨学金を支給し、HYI およびアメリカでの研究活動を支援するものである。筆者の参加した2022年度の VSP には、日本・中国・台湾・香港・韓国・ベトナム・シンガポール・タイの大学に在籍する研究者が集まった。コアになるのは30代から40代の若手および中堅研究者であるが、キャリア・ジェンダー・地域のバランスをとってメンバーが選考されているように見受けられた。専門分野は人文科学と社会科学の各領域にわたるが、近現代を専門とする研究者が３分の２を占め、筆者（専門は近世道教史）をふくめて、前近代を中心とする研究者は少数派であった。

VSP の特色として、訪問学者に対する手厚いサポートがあげられる。まず、物価が高騰し続けているアメリカで、家賃と基本的な生活費はカバーできるほどの滞在費が支給される。また、複数名での使用とはなるがオフィスも提供される。さらには往復の航空券、海外保険代、アメリカでの学会発表をする際の学会参加費と交通費、研究助手を雇用する費用も申請することができた。これほど好条件の訪問研究プログラムはあまり存在しないであろう。

また、研究分野が異なる訪問学者の交流を重視するのも VSP の特色といえる。プログラムの全期間を通して、各種のレセプションや会食、ハーバード周辺でのエクスカーションがセッティングされ、交流する機会が多く設けられる。また、短期旅行などの企画もあり、家族同伴の訪問学者にも配慮がされている（本稿を記している今頃は、ハロウィンパーティーが開かれていることであろう。）また、ハーバードのほかの研究機関（ライシャワー

センターなど）のイベントに招待されることもあり、そこでも他分野の研究者同士での交流が可能である。

肝心の研究活動であるが、訪問学者は滞在中に一回は講演会を行うのが義務となっており、そこで訪問学者が集まって質疑や討論が行われる。現HYI所長のElizabeth Perry教授（中国近現代史）が参加されることも多かった。司会は応募の際に希望したアドバイザー（ほとんどはハーバードに在籍している研究者）が担当し、HYI外部の聴講者も多いので、そこでも研究交流が行われるようになっている。

また、英語圏での研究活動をサポートするためのセミナーも開催された。Michael Puett先生（中国古代思想）はプレゼンテーションの改善方法、Michael Herzfeld先生（人類学）は英語のモノグラフ（単行本）を出版するための戦略をテーマにお話をされ、たいへん啓発的な内容であった。

イェンチン図書館（以下、HYLと略称する）を長期的に利用できることも、HYIにおける訪問研究の利点であろう。アメリカでも有数の蔵書数をほこるアジア関連図書館であり、各種の貴重書・資料のコレクションでも知られる。筆者のHYIにおける研究の眼目は、HYLに所蔵される清代に作成された道教や民間信仰に関する写本を調査することであった。Special Collection Room（貴重書閲覧室）の利用は火曜日と木曜日の週二回に限定されていたが、司書のAnnie Wang氏のサポートもあり、円滑に調査を進めることができた。また、調査対象の資料を購入した中国書籍担当のライブラリアンである馬小鶴氏とも協力関係を築くことができ、今後も資料調査を継続する予定である。

HYIの活動というわけではないが、教員の許可を得ればハーバードの授業を聴講することも可能である。筆者は、受け入れ教員のJames Robson先生（中国仏教・民間信仰）のゼミに参加させていただいた。ここ数年で出版された研究書を講読しながら、研究動向を把握するのを目的とする授業であった。最新の情報を入手できるのは留学ならではであろう。

それに加えて、今回たまたま資料講読も同時に行う授業も聴講することができた。Robson先生は敦煌文書の仏教文献、Michael Szonyi先生（近世以降の中国社会史）は清代福建における土地契約文書、阿部龍一先生（仏教学）は、鳩摩羅什訳『法華経』を講読した。よく言われることであるが、アメリカの大学院では資料の読解はそれほど厳密に行われるわけではなく、一字一句を丹念に辞書で調べて用例をチェックするようなことはしない。その代わり、参考文献のリーディングとの合わせ技で、研究方法を総体的に理解することが目標となる。一つのセメスターが終わると当該分野に関する知識をひと通り学ぶことができるように設計されており、先生方の手腕はあざやかであった。

以上、駆け足でHYIにおける在外研究を回顧してみた。こうして振り返ってみると、本当に夢のような環境で過ごした日々であったと思う（それだけに日本の研究環境とのギャップに苦しむが……。）HYIによる手厚い研究支援に報いるためにも、自らの研究を進めるとともに、アメリカと日本のアジア研究をつなぐ架け橋になるよう努力していきたい。

末筆ながら、HYIに滞在中にお世話になった方々、在外研究に送り出してくれた勤務先の慶應義塾大学と同僚の先生方に、この場を借りて厚くお礼を申し上げる。

（注）HYIの沿革について、詳しくは中島隆博「ハーヴァード・イェンチン研究所――沿革と現状」（『東方学』第110輯、2005年）を参照されたい。当時のVSPについてもふれられている。

イェンチン図書館の入り口

二〇二三年度日本中国学会賞について

今年度の受賞者は、文学・語学部門より林麗婷会員（対象論文は「ポスト五四を生きる青年男女――張恨水『金粉世家』と『啼笑因縁』を中心に――／『学会報』第74集）に決定し、10月７日（土）大阪大学豊中キャンパスで開催された第75回大会の総会において授与式が行われた。なお、選定理由は『学会報』第75集の彙報37頁に掲載。

授与式での林会員の挨拶は以下の通り。

皆様、本日はこの栄誉ある賞をいただくにあたって、心から感謝を申し上げたいと思います。査読してくださった先生、編集委員会の先生、及びこの論文を推薦してくださった先生に厚く御礼申し上げます。

私は20世紀中国人の越境と文学について研究しておりますが、張恨水は私の研究対象の中で、唯一外国に行ったことがない作家です。彼は中学校を卒業した後イギリスに留学しようと考えたのですが、一家の大黒柱だった父が亡くなったために、留学の夢は水の泡となりました。しかし彼は『啼笑因縁』や『金粉世家』など、作品中の男性主人公を外国に行かせています、彼は文学創作の中で世界にリンクしようとしたのです。

張愛玲は、1968年７月１日、コロンビア大学教授の夏志清に宛てた手紙でこう語っています。「私はずっと張恨水が好きでしたが、今まで済安以外に、張恨水を褒める人を見たことがありません。ほかには、毛沢東だけが張恨水小説のディテール、船であるとか籠であるとかの描写を褒めていましたが」と。夏済安は夏志清の兄で、50年代の台湾文学を牽引した評論家です。その夏済安と毛沢東に愛されたということは、張恨水の作品が思想や階級を超えていたことを示しているでしょう。

この論文は、神戸大学で特別研究員をしていたときに着想を得たものです。濱田麻矢先生をはじめ、神戸大学の中文研究室の仲間が励ましてくれたことにお礼を申し上げます。今後も、中国文学と文化の研究に情熱を傾けて新たな洞察を提供できるよう努力し続けます。本日はありがとうございました。

授賞式にて

各種委員会報告

【大会委員会】

委員長　野村　鮎子

（1）第75回大会について

2023年10月７日（土）・８日（日）、大阪大学において第75回大会が開催されました。今回は久しぶりに全面的な対面方式の実施でした。報告者・司会者・参加者がそれぞれの部会ごとに集まり、質問者は会場にて挙手し、その場で発言するという従来の方式です。昨年度の早稲田大学が対面と YouTube による同時配信のハイフレックス方式、2021年度愛知大学の第73回大会は Zoom でのライブ配信（特別講演会のみ事前収録配信）、2020年度慶應義塾大学の第72回大会はオンデマンド方式、その前の2019年度関西大学での第71回大会は超大型台風の襲来により中止となっておりましたので、従来の方式による発表も懇親会開催も実に５年ぶりのことでした。久しぶりの「正常化」ということで学会開催のノウハウの伝授が心配ではありましたが、開催校による入念な準備により順調に進行しました。あらためて準備会代表の浅見洋二会員や辛賢会員をはじめ運営に協力してくださった大阪大学教員ならびに非会員を含む学生諸氏に感謝申しあげます。

今回の大会では研究発表（哲学･思想＆歴史部会15名、文学・語学部会25名、日本漢学部会14名）と書評シンポジウム２つが行われました。事前参加登録者が313名､当日の来場者は88名、懇親会参加者は170名でした。久しぶりの全面的な対面ということもあり、多数の発表申し込みがあり、文学・語学部会は二つの会場に分かれての報告となりました。今回次世代シンポジウムへのエントリーはなかったのですが、研究推進・国際交流委員会が企画くださった書評シンポジウムを含めて、いずれの部会・シンポジウム会場にも多くの参加者が集まり、熱を帯びた研究発表と質疑が行われました。対面実施のありがたさを実感した大会でした。

会員同士が会場で「ひさしぶり」と言い合い、近況を報告し合い、書店の出店で近刊書を手にとることができるのも対面ならではことです。会員諸氏が同じように感じておられたことは懇親会の参加者が開催校の想定を上回る数だったことにも表れています。

なお、今大会の要項の表紙に「主催日本中国学会」と並んで｢共催大阪大学大学院人文学研究科｣の一文があったことにお気づきの方もおられたかと思います。近年、国立大学は法人化以降、世知辛くなり、学会開催にも会場使用料が必要というところが増えました。ただし大阪大学では部局との共催であれば無料とのことでした。開催校からの申し出を受けて大会委員会、理事会で審議の上、大学という公的機関との共催については問題なしと判断しました。要項の表紙に掲載するだけで特段何かを要求されたわけではないことは申し添えておきます。

（２）2024年度第76回大会について

2024年度日本中国学会第76回大会は、二松学舎大学（大会準備会代表　牧角悦子会員）において10月12日（土）・13日（日）に開催されます。第75回大会の会員総会及び閉会式では、牧角会員が「中国学のスタッフが充実している今、二学舎大学で大会を開催できることを光栄に思います。多くの方に足を運んでいただきたい」と挨拶しておられました。

【将来計画特別委員会】

委員長　弛　　和順

本委員会では、2020年以降、学会ホームページ上で、大会アンケートを行ってきましたが、先般開催された第75回大会（大阪大学）についても、同様のアンケートを実施しています。期間は2024年２月末日まで。ホームページ上の右側メニュー「大会関連のお知らせ」を経て、「大会アンケートに関するお願い」に記載の URL から入り、ご回答ください。

内容は、久しぶりに対面のみでの開催となった大会の

具体的な実施内容を中心におたずねするとともに、本学会へのご意見などを受付けます。所要時間は最短で５分程度ですので、是非、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

また、本学会のデジタル化推進の一環として、昨年、試験的に実施した「会員論著目録（2022年）」に続いて、今年も「会員論著目録（2023年）」の作成を試行します。あわせて、「会員論著目録（2022年）」の補遺についても、受け付けることにしました。詳細については、本便りに、大木理事長より、別途依頼文がありますので、ご一読の上、ご協力いただきますよう、お願いいたします。

【出版委員会】

委員長　高津　　孝

『日本中国学会報』掲載の学界展望（語学、哲学、文学）の中国語訳が日本中国学会ホームページに掲載されます。

『日本中国学会報』掲載の学界展望（語学、哲学、文学）の中国語翻訳事業は、2019年、当時の金文京・日本中国学会理事長によって提案され、中国社会科学院文学研究所の呉光興先生のご協力のもとで始まりました。すでに、『日本中国学会報』70集、71集、72集、73集分が『古代文学前沿与評論』（社会科学文献出版社）に掲載され、同じデータが中国社会科学院「古代文学前沿与評論」公式アカウント（微信）を通じて発信されております。今回、中国社会科学院文学研究所および呉光興先生に対して、大木康・日本中国学会理事長より正式に学界展望中国版の日本中国学会ホームページへの掲載申し入れを行ったところ、先方のご厚意で、学界展望・中国語版のpdf データを日本中国学会ホームページに掲載することが可能になりました。また、社会科学文献出版社の了解も得られたとのことです。現在、(『古代文學前沿与評論』（４輯、５輯、８輯）掲載の70集、71集、72集、73集、および掲載予定の74集分）のデータを拝領しております。中国社会科学院文学研究所および呉光興先生には感謝に堪えません。会員諸氏の皆様によって広く活用されることを願っております。

【研究推進・国際交流委員会】

委員長　三浦　秀一

昨年の第74回大会に引き続き、10月７日・８日開催の第75回大会においても書評シンポジウムを挙行いたしました。このシンポジウムは、本学会による「若手支援」を目的として企画されており、本年度もまた、パネルを構成された先生方をはじめ多くの関係各位のご助力のもと、成功裏に終了することができました。ご来場の会員諸氏には、心より御礼申し上げます。

書評シンポジウムは、来年度の学会大会（主催校：二松学舎大学）でも実施する予定です。募集要項は来年度の『学会便り』（2024年第１号）に掲載いたしますが、応募をお考えの会員各位におかれましては、前もって、下記３点の基本方針に目を通してください。本年度同様、募集はパネル単位でおこないます。パネルの人員構成に関する相談などについて、当委員会は喜んで対応いたします。

記

①書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術的専著で、2020～2022年に刊行されたものとする。

②評者の年齢は、原則として書評の対象とする学術書の著者のそれ以下とする。ただしパネルの構成上、著者の年齢を多少上回る評者が必要な場合は、それも認める。

③専門領域・所属機関・性別などについて多様性に配慮したパネルを歓迎する。あわせて、評者のなかに非会員が含まれることも、１名限定ではあるが認める。

シンポジウムにおける評者各位の報告は、学会 HP『研究集録』に掲載します（昨年度分は掲載済み）。執筆に関しては、①原稿の枚数は20枚程度を上限としてそれより短くとも可、②提出期限はシンポジウム翌年の１月末、③表記や内容等の確認は当委員会内でおこなう、といった要項をまとめております。

2023年度 会員動向／新入会員一覧

◉会員動向（2023年10月1日現在）

総会員数1,494名、準会員数46機関、賛助会員数13社

◉退会会員

○退会申出会員（昨年度第３回理事会承認分）　９名

小黒　浩司	佐藤　進	武信　彰
張　培華	松岡　秀明	張　莉
李　青	伊藤　浩志	高橋　明郎

○退会申出会員（今年度第１回理事会承認分）　11名

安達富美雄	何　旭	神山　ゆき
周　舒静	山口　守	高　文軍
浦部　依子	小林　和代	神戸　宏明
合山　究	鄭　宰相	

○退会申出会員（今年度第２回理事会承認分）　８名

坂野　学	倉　雅晨	芦立　一郎
丁　鋒	盆子原和幸	村田久美子
平井　和之	木村　淳美	

○４年間の会費滞納による退会会員　28名＋１社

◉住所不明会員　29名

楊　世帆	石塚　薫	井上　雅隆
尾形　幸子	川　浩二	段　書暁
張　瀛子	宮内　四郎	余　祺琪
楊　冰	綿本　誠	末岡　宏
田中　邦博	西口　智也	池田　智幸
Wood Jeremy	大西　翔	滝野　邦雄
田中　京	張　齡云	陳　潮涯
陳　駿千	白　雲飛	森　宏之
李　杰玲	黎　小雨	山口　綾子
李　麗君	蒙　顕鵬	

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

◉新入会員一覧

10月６日に開催された2023年度評議員会において入会が承認された方々は、以下の通りです。

◉通常会員　８名

橋本　秀美	青山学院大学
薄　鋒	東京大学（院）
武　清陽	京都大学（院）
趙　超敏	広島大学（院）
凌　玲	北海道大学（院）
阿部　沙織	拓殖大学
室　貴明	東北大学（院）
楊　文溢	京都大学（院）

◉準会員　１機関

琉球大学付属図書館

なお、以下の方々については３月27日、６月４日付で開催された臨時評議員会（メール審議）において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

◉通常会員　58名

山口　早苗	王　怡静	ガイ　ホッブス
王　国強	劉　欣佳	岑　天翔
費　康幸	呂　輝菲	市原　靖久
丁　欽馨	謝　文君	王　悠静
孫　楚珮	張　禧睿	王　書凝
王　愷珺	安原　大熙	方　逸韻
早川　侑哉	藺　豪	徐　爽
葉　宇軒	髙江　啓祐	陳　銘
張　志偉	趙　珊	杜　絡嘉
劉　孟磊	李　恒	佐々木正清
呉　修喆	莫　寒	郭　姣
欒　暁涵	湯　青妹	楊　婷婷

于　昊甬　　朱　未　　蒋　義喬
呉　優美子　　高　玥峰　　仲村康太郎
王　杏芳　　LI Shen　　曾　令之
板橋　暁子　　海藤　水樹　　金　スマロ
中村　直登　　陳　暁淇　　蔵田　直美
劉　佳佳　　項　依然　　張　亜琳
郭　俣　　汪　憶霏　　胡　婧
何　松延

訃　報

『学会便り』2023年第１号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（敬称略）

西林　昭一	（関東地区）	2022年７月８日
渡辺　精一	（関東地区）	2022年９月26日
山本　和義	（中部地区）	2023年４月21日
君島　久子	（関東地区）	2023年６月８日
野澤　俊敬	（北海道地区）	2023年９月16日
興膳　宏	（近畿地区）	2023年10月16日

日本中国学会 2022年度（令和４年度）収支決算書

2022年４月１日～ 2023年３月31日

（単位：円）

	科　目	予　算	決　算	摘　要	差　額
収入の部	1. 前年度繰越	¥25,295,113	¥25,295,113		¥0
	2. 会員会費	¥9,000,000	¥8,733,000		¥-267,000
	3. 寄付金	¥800,000	¥765,180		¥-34,820
	4. 預金利息	¥200	¥155		¥-45
	5. 著作権料分配金	¥0	¥0		¥0
	総　　計	¥35,095,313	¥34,793,448	(A) 収入総計	¥-301,865

	科　目	予　算	決　算	摘　要	差　額
支出の部	**1. 事務局総務費**	**¥2,260,000**	**¥1,431,859**	(1)～(7)	**¥828,141**
	(1)印刷費	¥650,000	¥392,422	「便り」・封筒印刷費を含む、改選年	¥257,578
	(2)通信費	¥650,000	¥395,077	「便り」発送費を含む、改選年	¥254,923
	(3)交通費	¥100,000	¥23,726	事務局補佐員交通費等	¥76,274
	(4)消耗品費	¥50,000	¥23,234		¥26,766
	(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
	(6)雑費	¥550,000	¥387,400	振込手数料等、電子投票費用を含む	¥162,600
	(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
	2. 事務局人件費	**¥1,560,000**	**¥1,494,000**	(1)(2)	**¥66,000**
	(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
	(2)謝金	¥1,200,000	¥1,134,000	事務局補佐員謝金を含む	¥66,000
	3. 事務局会議費	**¥520,000**	**¥112,274**	(1)(2)	**¥407,726**
	(1)会議費	¥120,000	¥3,240		¥116,760
	(2)役員旅費	¥400,000	¥109,034	会計監査、第３回理事会	¥290,966
	4. 事業費	**¥4,880,000**	**¥4,625,046**	(1)(2)	**¥254,954**
	(1)学会報等刊行費	¥3,880,000	¥3,625,046	イ～ニ	¥254,954
	イ. 印刷費	¥2,000,000	¥1,884,630	学会報及び名簿	¥115,370
	ロ. 編集費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
	ハ. 翻訳謝金	¥330,000	¥210,000	英文要旨作成	¥120,000
	ニ. 発送費	¥350,000	¥330,416	㈱サンセイ業務委託等	¥19,584
	(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥1,000,000		¥0
	5. 各種委員会運営費	**¥1,340,000**	**¥326,098**	(1)～(7)	**¥1,013,902**
	(1)大会委員会	**¥65,000**	**¥5,000**		**¥60,000**
	イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥0		¥50,000
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(2)論文審査委員会	**¥780,000**	**¥200,982**		**¥579,018**
	イ. 通信費	¥100,000	¥120,629		¥-20,629
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	¥3,020		¥596,980
	ハ. 謝金	¥60,000	¥70,000		¥-10,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥7,333		¥12,667
	(3)出版委員会	**¥230,000**	**¥22,008**		**¥207,992**
	イ. 通信費	¥5,000	¥982		¥4,018
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥660		¥199,340
	ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥366		¥4,634
	(4)選挙管理委員会	**¥120,000**	**¥22,525**	改選年、電子投票を初実施	**¥97,475**
	イ. 通信費	¥15,000	¥2,425		¥12,575
	ロ. 会議・旅費	¥60,000	¥0		¥60,000
	ハ. 謝金	¥40,000	¥20,000		¥20,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥100		¥4,900
	(5)研究推進・国際交流委員会	**¥20,000**	**¥9,732**		**¥10,268**
	イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥4,262		¥738
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥100		¥4,900
	(6)広報委員会	**¥105,000**	**¥60,206**		**¥44,794**
	イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	¥29,836	ドメイン使用料・サーバー使用料を含む	¥20,164
	ホ. ホームページ管理費	¥35,000	¥20,000		¥15,000
	(7)将来計画特別委員会	**¥20,000**	**¥5,645**		**¥14,355**
	イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥275		¥4,725
	1 ～ 5	**¥10,560,000**	**¥7,989,277**		**¥2,570,723**
	特別会計積立基金拠出	¥0	¥0	学会基金(学会賞)に充当	¥0
	特別会計積立基金拠出	¥3,000,000	¥3,000,000	特別寄付金会計(若手支援)に充当	¥0
	予備費	¥21,535,313	¥0	支出費目としては計上しない	¥21,535,313
	合　　計	**¥35,095,313**	**¥10,989,277**	(B) 支出合計	**¥10,989,277**
	次年度繰越金	—	¥23,804,171	(A)収入総計－(B)支出合計	
	総　　計	**¥35,095,313**	**¥34,793,448**		**¥301,865**

学 会 基 金

	基　本　金	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥998,066
	特別会計積立金拠出	¥0
	預金利息	¥66
	信託収益金	¥0
	合　　計	¥998,132
支出の部	日本中国学会賞	¥80,000
	次年度繰越金	¥918,132
	合　　計	¥998,132

特別寄付金会計

収入の部	特別寄付金会計拠出	¥3,000,000
	前年度繰越金	¥0
	特別寄付金	¥0
	預金利息	¥16
	合　　計	¥3,000,016
支出の部	日本中国学会賞（上乗せ分）	¥40,000
	大会発表者宿泊費補助金	¥100,000
	次年度繰越金	¥2,860,016
	合　　計	¥3,000,016

備考（基本金内訳）

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2023年4月23日
日本中国学会監事

内山精也
牧角悦子
永冨青地

日本中国学会 2023年度（令和５年度）予算書

2023年４月１日～ 2024年３月31日

（単位：円）

	科　目	予　算	摘　要
収入の部	1. 前年度繰越	¥23,804,171	
	2. 会員会費	¥9,000,000	
	3. 寄付金	¥800,000	
	4. 預金利息	¥200	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合　　計	¥33,604,371	

	科　目	予　算	摘　要
支出の部	**1. 事務局総務費**	**¥1,720,000**	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥480,000	「便り」・封筒等を含む
	(2)通信費	¥480,000	「便り」 発送費を含む
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥350,000	振込手数料･対外費を含む、非改選年
	(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
	2. 事務局人件費	**¥1,740,000**	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥540,000	幹事３人体制
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐員謝金を含む
	3. 事務局会議費	**¥200,000**	(1)(2)
	(1)会議費	¥100,000	
	(2)役員旅費	¥100,000	第1回理事会はオンライン開催
	4. 事業費	**¥4,880,000**	(1)～(7)
	(1)学会報等刊行費	¥3,880,000	イ～ニ
	イ. 印刷費	¥2,000,000	学会報及び名簿
	ロ. 編集費	¥1,200,000	
	ハ. 翻訳謝金	¥330,000	英文要旨作成・中国語版翻訳補助謝金
	ニ. 発送費	¥350,000	(株)サンセイ業務委託等
	(2)学術大会運営補助費	¥1,000,000	
	5. 各種委員会運営費	**¥1,260,000**	(1)～(7)
	(1)大会委員会	**¥65,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	**¥800,000**	
	イ. 通信費	¥120,000	
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	**¥230,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	
	ハ. 謝金	¥10,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	**¥20,000**	非改選年
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	**¥20,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(6)広報委員会	**¥105,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥20,000	幹事２人体制
	ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	ホームページ維持費を含む
	ホ. ホームページ管理費	¥25,000	
	(7)将来計画特別委員会	**¥20,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	1～5	**¥9,800,000**	
	特別会計拠出	¥0	
	特別寄付金会計拠出	¥0	
	予備費	¥23,804,371	
	合　　計	¥33,604,371	

学 会 基 金

	基　本　金	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥918,132
	預金利息	¥100
	信託収益金	¥0
	合　　計	¥918,232
支出の部	日本中国学会賞（基金分）	¥80,000
	次年度繰越金	¥838,232
	合　　計	¥918,232

特別寄付金会計

収入の部	特別寄付金会計拠出	¥0
	前年度繰越金	¥2,860,016
	特別寄付金	¥0
	預金利息	¥10
	合　　計	¥2,860,026
支出の部	日本中国学会賞（上乗せ分）	¥40,000
	大会発表者宿泊費補助金	¥200,000
	次年度繰越金	¥2,620,026
	合　　計	¥2,860,026

備考（基本金内訳）

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

事務局からのお知らせ

彙報

2023年度第１回理事会（６月４日開催、オンライン会議）での決定事項について、６月４日付で臨時評議員会（メール審議）を開催した。報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

・2023年度日本中国学会賞受賞者の決定について

［文学・語学部門］

林　　麗婷　会員

「ポスト五四を生きる青年男女――張恨水『金粉世家』と『啼笑因縁』を中心に」

【審議事項】

・新入会者の決定について

・2023年度定例評議員会の開催方法について

・顧問嘱任の件について

10月６日に開催した2023年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

・理事長報告

・各種委員会報告

・『日本中国学会報』第75集及び会員名簿の発行について

・学会報編集担当・大会開催校等について（2024年度）

学会報編集担当

洲脇　武志　会員（愛知県立大学）

学界展望執筆担当

哲学／鶴成　久章　会員（福岡教育大学）

文学／小川　恒男　会員（広島大学）

語学／秋谷　裕幸　会員（日本中国語学会・愛媛大学）

学会便り編集担当（2023年第２号）

宇佐美文理　会員（京都大学）

学会便り編集担当（2024年第１号）

古勝　隆一　会員（京都大学）

大会開催校　二松学舎大学

・会員動向について

・その他

【審議事項】

・2022年度決算・監査報告

・2023年度予算案

・新入会員の承認

・2023年度総会次第について

・その他

10月７日の2023年度総会において、評議員会での議決事項を報告した。

◎顧問の委嘱について

2023年度第１回理事会（６月４日開催）、臨時評議員会（６月４日付、メール審議）の議を経て、次の会員に顧問を委嘱することになりました。

藤井　省三　会員

◎顧問と特別会員の住所不明者に対する扱い等について

顧問と特別会員について、４年間住所不明が継続した場合、退会扱いとさせていただくことになりました。また、逝去に関する信頼のおける情報がインターネット上等で確認された場合も、同じく退会扱いとさせていただくことにいたします。この場合、逝去された会員について、学会便りへの訃報の掲載や総会での黙祷は行わないものとします。

◎特別寄付金会計寄付者（20万円以上、歴代）

2021年度：加地　伸行　会員（300万円）

◎会費の納付について

会費未納の方は、まずは事務局までお問い合わせ下さ

い。２ヶ年（2022・2023年度）未納の方には、今年度の学会報を送付しておりません。また、４年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、あるいはファックスでも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を行っております。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページの URL をお送りいたします。なお、利用可能ブランドは VISA・MASTER のみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org
郵　便：〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内
ファックス：03-3251-4853
ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：00160-9-89927
加入者名：日本中国学会

メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録頂いていない方はホームページの「メールアドレス登録（会員専用）」（URL：http://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2274）よりご登録をお願いいたします。

パスワードは sinology1234です。メールアドレスの変更も、上記の登録フォームから可能になりました。

登録フォームにアクセスできなかった場合は、事務局（info@nippon-chugoku-gakkai.org）宛に、メールアドレスをお知らせください。

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年４月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2023年１月から同年12月末までに開催された国内学会の原稿は、来年（2024）２月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。

従来ご報告が無かった学会（研究会）のご報告も歓迎いたします。

なお、紙面の都合上、お送りいただいた原稿を編集局で一部加工することがあります。また、校正はありませんので、あらかじめご承知おきください。

また、Zoom や Teams、あるいは YouTube 動画配信などさまざまな開催形態で行われたと思いますが、本紙ではそれらを一括して「オンライン開催」と表示させていただきます。

原稿送付先：kogachiryuichi+gakkaidayori@gmail.com
（京都大学・古勝隆一あて）

「会員論著目録（2023年）」作成への協力のお願い

会員各位

日本中国学会理事長　　大木　　康

すでに日本中国学会ホームページにおいてご案内のように、本学会では、デジタル化推進の一環として、昨年に引き続き、下記のとおり、「会員論著目録（2023年）」の作成を試行することになりました。会員の皆様に、Google フォームのアンケートに回答入力する方法でデータをご提供いただき、作成した目録は、学会ホームページでの公開を予定しております。

つきましては、入力に必要なパスワードをお知らせしますので、是非とも、アクセスの上、入力にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

記

【対　　象】2023年１月～12月に発表された論文・著書等

【入　　力】原則、会員自身が入力する。ただし、入力が困難な場合は、メールや書面による提出を学会事務局で受け付ける。

【入 力 期 間】2023年12月～2024年３月末

【パスワード】roncho2023

【分類・区分】従来の形式を踏襲し、「哲学」「文学」「語学」の３つに大別した上で、時代･分野等に細分する。また、複数の区分にまたがる内容の論著については、一箇所への入力に限定するのではなく、必要に応じて複数回、関連する区分に回答入力できることとする。

なお、「会員論著目録（2022年）」の補遺についても、同期間、入力できますので、該当の場合は、ご記入くださいますよう、お願いいたします。

※不明の点がありましたら、学会事務局にお問合せください。

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1．日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2．応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3．原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。

4．原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のように定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求めることがある。なお、手書き原稿提出の場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。

5．図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（１行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6．原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、横書きも可とする。

7．引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。

8．原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、本文９ポイント、括弧内は８ポイントを、注はすべて８ポイントの活字を使用する。特に本文括弧内を９ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。

9．注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記については、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。

10．中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11．応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。

12．学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13．原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内　日本中国学会

14．応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学、歴史）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。

15．応募時には、本文・要旨をそれぞれ４部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。

16．応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校　　正

17．執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜　　刷

18．論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

そ　の　他

19．掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）　（平成13年５月13日修正）
（平成14年10月13日一部修正）　（平成15年10月５日一部修正）
（平成19年10月７日一部修正）　（平成20年５月17日一部修正）
（平成21年10月11日一部修正）　（平成22年６月６日一部修正）
（平成22年10月10日一部修正）　（平成23年10月９日一部修正）
（平成24年10月７日一部修正）　（平成25年３月31日一部修正）
（平成25年10月13日一部修正）　（平成27年10月10日一部修正）
（平成29年６月12日一部修正）　（平成30年６月３日一部正）
（令和４年10月５日一部修正）